

ドッキネーシヨルのカーリー寺院

今日は日曜日である。信者たちは休日なので、三々五々連れだつて大聖シュリー・シュリー！大覚者パラマハンサ・デーヴァ様にお会いするため、南神ドッキネーシヨルのカーリー寺院にやつてくる。どんな人でも来ていいのだ。かれらがくると、神人は皆といつしよにお話をなさる。修行者サードゥ、覚者パラマハンサ、ヒンドゥー教徒、クリスチャン、ブラフマ協会の会員、それからヒンドゥー教のなかのシャクティ派の人、ヴィシュヌ派の人、善男善女——実にさまざまな種類の人びとが来るのである。おお、何と祝福された御方ラースマニよ！この御方の功德によつてこの美しい立派な寺院は建立され、その上また、この動く神像——この至尊バガヴァンの神人のもとへ来てお会いし、礼拝することができるのである。

〔チャドニーと十二のシヴァ堂〕

南神ドッキネーシヨル・マンディール寺——一名カーリー寺院は、カルカッタからおよそ五マイル（八キロ）程北にある。ガングス河に面している。舟から下りて幅広い石段を東向きにのぼつて、カーリー寺院に入るようになってゐる。この沐浴場ガートで大覚者様は沐浴をなさつたのである。石段を上りつめるとチャドニー（日覆い）がつき四方が開放された石畳の間である。そこにいつも寺の門番たちがいて、彼らの使う簡易の寝台や、

身の回りの品を入れておくマンゴー材の頑丈な箱や、真鍮製の水壺などがとどころに置かれている。近所の旦那方がガンガーに沐浴にくると、誰かれとなくそのチャドニーに坐りこんで、世間話をしながら体に油をぬるのである。

ヒンドゥー教の出家(サードゥ)も、イスラム教の遊行僧(ファキール)も、またヴィシシュヌ派の男女も、接待所でブラサード(供物のお下がり)をいただきにくる人々はみな、神様に食事を捧げるベルがなるまで、このチャドニーで待っているのだ。時どき、濃橙色の衣を着たシヴァ派の女行者が、三叉の鉾ほこを持ってここに坐っているのを見かけることもある。こういう人も、その時間がくれば接待所へ行くのである。

チャドニーは十二のシヴァ堂の真ん中に位置している。シヴァ堂はチャドニーの真北に六つ、真南に六つ並んでいる。ガンジス河を往来する船旅の人びとは、この十二のシヴァ堂を遠くから眺めて、「ああ！ あれがラースマニ夫人の建てたお寺だ！」と言うのである。

〔煉瓦敷きの境内、およびヴィシシュヌ堂〕

チャドニーと十二のシヴァ堂の前は、煉瓦を敷きつめた中庭になっていて、そこに二つのお堂が並んでいる。北側のがラーダーカーンタ堂、南側のがカーリー堂だ。ラーダーカーンタ堂はヴィシシュヌ堂とも呼ばれていて、クリシュナとラーダーの像が西向きに祀られている。お堂へは階段で上がれるようになっていて、床は大理石が敷きつめてある。お堂に上がってすぐの屋根つきの張出し廊下には

シャンデリアが掛かっているが、昨今は使用していないので赤い布のカバーで覆ってある。門番がひとり、常時その辺りに詰めている。午後、西日が差してお祀りしている神像にご不便をかけないように、厚布の日除けがかかっている。その日除けは、入り口の広い張り出し廊下の何本も並んだ柱と柱の間にかけてられている。南東の角には、ガンジス河の水を入れておくための大きな水がめが一つ置いてある。お堂の入り口の敷居のそばに器が一つあって、中に「チャラナムリタ（聖なる御足の甘露水）」と呼ばれる聖水が入っている。信者たちが来ると、神々を礼拝してその聖なる水をいただいでいくのである。お堂の中央にあるのは聖なるクリシュナとラーダーが玉座についている御像だ。聖ラーマクリシュナは最初、このお堂の役僧として雇われていらっしやったのである。——西暦一八五七年から五八年にかけての間であった。

〔至聖の救世神、大実母カーリー〕

南側のお堂には、美しい石で彫刻したカーリーの神像が祀ってある！ 大実母カーリーは「バヴァタリニー（救いの女神）」と言われている。白と黒の大理石張りのお堂の床の上に階段状になった壇があり、その壇の上に銀造りの千弁の蓮華の台座、そしてその上にシヴァ大神が死骸のように頭を南へ向け、足を北に向けて仰向けに横たわっておられる。シヴァの彫像は白い大理石で出来ている。この御方の胸の上で、ベナレス絹の衣装をまとい、さまざまな装身具で荘厳されて立っているのが、三つの眼を持った美しい女神、黒いカーリーの石像である。聖なる蓮華の御足には、ヌプールと呼ばれる

鈴のついた足飾りや、グジエリ、パンチョン、パンジエブ、チョットキなど、さまざまな種類の足飾りをつけている。ハイビスカスとビルヴァの葉も飾られている。パンジエブはパンジャブ地方などの西インドの女性がよく足につける飾りで、大覚者様のたつての御希みおのぞめでマトゥール氏が着けたのである。

大実母の腕はバウティ（幅の広い腕輪）やタヴィジ（二の腕につける腕輪）で飾られている。これらの飾りはいずれも金で出来ている。手首はバーラ（腕輪）、花の輪飾り、ポイチエ（腕輪）、バウティなどで飾られ、二の腕はタール（二回半腕に巻きつける腕輪）やタヴィジ、下げ飾りが揺れるバジュと呼ばれる腕輪で飾られている。首には金の首飾りをつけ、七連の真珠の長い首飾り、三十二連の金の首飾り、星形のチェーソンの首飾り、さらに、頭骸骨を束ねた黄金の首飾りをかけている。頭には金の冠をつけ、耳にはカンバラやカンパシユと呼ばれる耳飾り、金のイヤリング、チャンダニと呼ばれる耳飾り、魚の形をした金の耳飾りをつけている。鼻には真珠のついた鼻輪をつけておられる。三つ眼の女神は、二本の左手に人間の生首と曲がった刃の剣（タガ）を持っており、二本の右手は慈悲と施無畏（おそれを除く）の印を結んでいる（腕が左右に二本ずつ、四本ある）。腰のまわりには人の腕をつなぎ合わせた腰飾りや、ニームの実やカマルパタと呼ばれる腰につける飾りベルトを着けている。

寺院の北東の隅には色どり豊かな寝台——大実母が休息なさるためのもの——が置いてある。壁の一方にはチャマラと呼ばれる大きな扨子（はつす）が掛かっている。至尊（バガヴァン）、聖ラーマクリシュナはこのチャマラで、幾度となく数えきれないほど大実母を扇いで差し上げたことか。祭壇の上の蓮華台のところに水の入った銀のコップが置かれている。床にはいくつかの水差しが並べられている——女神が（シャイマ）お

飲みになる水だ。蓮華台の西には八種の金属でできた獅子ライオン、東には大トカゲの像と三叉の鉞、祭壇の南西には牝キツネ、南側には黒い石で彫られた牡牛、北東には白鳥、祭壇に上がる段上には銀製の小さな玉座の上に安置されたナーラーヤナ神の石像、そのそばには大覚者様が出家修行者からいたたいた、八種の金属でできたラームラーラと呼ばれるラーマの像と、ヴァネーシユワルと呼ばれるシヴァ像が安置されている。その他にも様々な神の聖像がある。

大実母マタカーリーは南に向いて立つておられる。大実母のちょうど正面、祭壇の南側には水を入れた容器が置かれている。礼拝が終わると、この容器は花輪で飾られ、又色とりどりの花が献じられ、朱の色がつけられる。神の恩寵をいたたく為の神聖な水を入れた容器である。もう一方の壁には銅製の水差しが置かれている。——大実母マタがお顔をお洗いになる水が入っている。

お堂の上からは天蓋が吊されており、神像のうしろはとても美しいベナレス産の絹のサリーを広げて飾ってある。祭壇の四隅には銀製の柱があり、その上にとても立派な天蓋があり、この柱で支えている。これによって、神像はますます荘厳に輝いて見えるのである。回廊に通じるいくつかの出入口は重い頑丈な扉で守られており、いつも番人が警備のために坐っている。その敷居のそばに、礼拝に使われたチャラナムリタ（聖なる御足の甘露水）の入った小さな容器が置いてある。

カーリー堂の建物の頂きは九つの尖塔で荘厳されている。下から四つの尖塔、少し高い位置にさらに四つの尖塔、そして中央上部には一つの大きな尖塔がそびえている。しかし、今は修理が必要だ。このお堂とラーダーカーンタ堂で、大覚者様はいろいろなお勤めをなさっておられたのである。

〔舞堂〕
ナト・マンデル

カーリー堂の真向かい、つまり南の方に壮麗な舞堂がある。舞堂の屋根の正面にはマハーデーヴァ(シヴァ大神)とその従者ナンディーとプリンギーが鎮座している。大実母カーリーのお堂に入つて行く前に、先ず、聖ラーマクリシュナはこの大神に手を合わせて拝まれるのが常であつた。あたかも、大神の許可をうけてお堂にお入りになるかのように――。舞堂は非常に高い柱が対になって南北に並んで立つており、その上が屋根になつている。柱の列は東と西にそれぞれ分かれて両方ともにある。礼拝の時、大祭のとき(特にカーリー祭の日)には、この舞堂で宗教劇が行われる。この舞堂でラースマニ家のムコであるマトゥール氏は聖ラーマクリシュナの指示に従われ、新米の献饌をした。この舞堂で、神人、聖ラーマクリシュナは皆の前でバイラヴィー(ヨーゲーシワリ)を礼拝されていたのである。

〔倉庫、食堂、接待所、犠牲台〕
いけにえ

長方形の境内の西側には十二のシヴァ堂があり、ほかの三方には平屋の建物がある。東側の建物のなかには倉庫、ルチ(揚げパン)をつくる部屋、ヴィシュヌ堂の食事をつくる台所、お供え物の準備をする部屋、カーリー堂の食事をつくる台所、バラモンの料理人たちのいる台所や接待所がある。客や修行者がこの接待所で食事をしない場合は、事務所の支配人のところへ行かなくてはならない。支配人が倉庫の番人に命じれば、修行者は倉庫から食料品の支給が受けられる。舞堂の南側は犠牲を捧

げる場所である。

ヴィシユヌ堂の料理は野菜だけでこしらえる。カーリー堂の食事は、また別に台所がある。その台所の前では、使用人たちがものすごく大きな包丁で魚を切っている。新月の日には、牝山羊が頭、犠牲いけにえに供えられる。神々へ食事をお供えする時間は定まきっていて、正午までには献上は終わわつていいる。その頃には、接待所でひとりひとり一枚ずつ沙羅さらの葉を持って、列になつて乞食やヴィシユヌ派の信者や修行者などの参詣人が坐っている。バラモンたちには、別に離れた場所に席がもうけてある。ここで働くバラモンたちも、別なところに席が用意されている。支配人のための食事(テラサード)は、その人の部屋まで届けられる。ジャンパサルから旦那方が来た場合は、クテイ(館)で休息される。その時はクテイにお食事(テラサード)が届けてもらえる。

〔事務所〕

境内の南側に連なる建物の部屋は、事務所と職員たちの宿舎になつている。ここには管理人や職員がいつも泊ままつていいる。また、倉庫の番人や男女の使用人、役僧、炊事の女性、バラモンの料理人など、また門番たちもいつも出入りしているのが見られる。これらの部屋のうち、いくつかは鍵が掛かっている。そのなかに神殿の備品、じゅうたん、テントなどがしまつてある。この並びのいくつかの部屋は、大覚者様の生誕祭のときに使うものを入れておく倉庫として使われている。その南に広がる土地は、大きな祭典のとき臨時の料理場になる。

境内の北側にも部屋が並んだ平家の建物がある。そのちょうど真ん中に門がある。チャドニーと同じように、そこも門番がいて警備にあたっている。どこから境内へ入るにせよ、先ず、外で履き物を脱がなければならない。

〔^{タクル}神人、聖ラーマクリシュナの部屋〕

境内のちょうど北西の隅、つまり、十二のシヴァ堂の真北にあたるところに、^{シヨトー・シニリー・バラマハンサ・デーヴァ}大聖大覚者様——タクル、聖ラーマクリシュナのお部屋がある。部屋の西側に半円形のペランダがある。このペランダでよく、聖ラーマクリシュナは西を向いてガンジス河を眺めていらつしたものだ。このペランダの前は道になっている。道の西側は花園。その向こうは堤防である。それに続いて聖なる水、世にも神聖なる流れ、滔々^{トウトウ}と音をたてて、あらゆる巡礼地を集めて流れる大河ガンジスである。

〔ナハバト(音楽塔)、バクル樹のあるところ、および^{パンチャパテ}五聖樹の杜〕

大覚者様の部屋の真北に四角形のペランダが一つあって、そのまた北に庭の小道がある。その先がまた花園になっている。それにつづいてナハバト(二階建ての音楽塔)。^{ナハバト}音楽塔の下の部屋にかの御方あやにかしこき神聖な方、この上なく尊崇されている老婦人——タクルの母上様が、またその後では^{シヨトー・シニリー・マ}大聖母が住んでおられたところだ。音楽塔の後ろはバクルタラと呼ばれているバクル樹(ミサキノハナ——サンスクリットでヴァクラ)などの樹々が茂る処で、そのすぐ下に沐浴場(バクルタラ・ガート)

があり、ここでこの付近の女性たちが沐浴するのである。このガートで大覚者様の老令の母なる神女が身罷みまかった。西曆一八七七年のこと。

バクルタラより少し北に五聖樹パンチャパテイの杜ト（五聖樹——バニヤン、アスワッタ、ニーム、アマラク、ビルヴァ）がある。このパンチャパテイの根元に坐つて、大覚者様は長い間きびしい修行をなさつておられた。それが昨今は、この辺を信者たちといつしよにいつもブラブラ散歩なさつてゐる。深夜にもときどき起きて、そこに行かれたものだ。五聖樹パンチャパテイの杜トの木——バニヤン樹、アスワッタ樹、ニーム樹、アマラクおよびビルヴァ（ベルの樹）——タクルルがご自分で手ずから植えられたものだ。聖地プリンダーヴァンから戻つてみえて、此処にそこから持つてきた土を撒かれた。この五聖樹パンチャパテイの杜トのちようど東側に一戸の丸太小屋をつくつて、至聖なる聖ラーマクリシュナはそこへ入つて長い間神を想ひ、修行にいそしんでおられたのである。この小屋は、今では煉瓦造りになつてゐる。

パンチャパテイのなかに古いバニヤン樹が一本ある。その木と共にアスワッタ樹が一本生えているが、二本が合わさつて、まるで一本の木のようになつてゐる。樹令を重ねた木は非常に老令であるため、たくさんの空洞があつて、さまざま種類の鳥やほかの動物たちの格好すまかの住家すまかになつてゐる。その根の部分は煉瓦で段々状に固めてあり、円形の台座に整えられてゐる。この聖なる場所の北西の辺りで、至聖バガヴァンの聖ラーマクリシュナは坐を組まれ修行を積まれたのである。そして、仔牛のために母牛が夢中になるように、ちようどそんな具合に、切ない想いで神に向かつてどれほど呼びかけられたことか。現在はこの清浄なる座の跡は、バニヤン樹の夫婦樹めおとのアスワッタの一枝が折れている。この枝

は完全に折れているわけではない。半分は根元のところであつながつている。この場所に坐るような聖人が、その後まだ現れていないことが知れる。

〔ジャウタラ、ベルタラ、およびクテイ（館）〕

五聖樹パンチャバタイの杜からなお北にすこし行くと、鉄条で囲った柵がある。この柵の向こう側がジャウタラだ。ジャウ樹ベンガル松が四本ならんでいる。ジャウタラから東にすこし行くとベルタラベル＝ビルヴァ＝菩提樹だ。ここでも、大覚者様は多くのむずかしい修行をなさつたのである。ジャウタラとベルタラの後方は高い塀へいになつていて、その北方には政府の火薬庫がある。

境内の外門から北へ向けて出ていくと、正面に二階建ての館が見える。ラースマニ家の奥方が神殿に來られたときは、娘婿のマトウル氏などと共にこの館に滞在されるのが常であつた。この方々の在世中、大覚者様はこの建物の一階の西側の部屋に住んでおられた。この家からはバクルタラの沐浴場にも行けるし、また、ガンジス河が大そうよく眺められる。

〔皿洗い沐浴場ガト、ガジタラ、および二つの門〕

境内の外門と、クテイ二階建ての館の間にある道を東にどんどん行くと、右の方にセメントで固めた沐浴場を備えた美しい池がある。大実母カーリー寺院の真東に祭具や神器を洗う為のガートがあり、皿洗いガートと呼ばれている。また、前述の道からさして離れていないところにもう一つガート

がある。道ぎわのそのガートの近くに樹が一本あり、それをガジタラと呼んでいる(昔、イスラム教の聖者が神を黙想していた場所)。その道をもすこし東方に行けばまた外門が一つあるが、これは庭園から外へ通じる正門だ。この門を通つてアラムバザールやカルカッタの人々が往来するのである。近隣の南神ドッキネーシヨルの人たちは裏門(正門よりさらに北にある)から入ってくる。カルカッタからの人々は、大い正門を通つてカーリー寺院へ参拝するのである。その場所にも門番が坐つていて警戒している。カルカッタから大覚者様が夜おそくカーリー寺院にお帰りになるようなときは、この正門の番人がカギを開けてくれるのが常だった。大覚者様はよくこの門番を呼んで部屋へ連れて行き、神様へ供えたお下がりのプリー(揚げパン)や砂糖菓子などを与えられたものだ。

〔白鳥の池、馬小屋、牛舎および花園〕

五聖樹パンチャパテイの杜ハンスラクルの東にもう一つ、白鳥池ドッキネーシヨルという名の池がある。その池の東北の角のあたりに馬小屋と牛舎がある。牛舎の東に裏門があつて、この門から南神村ドッキネーシヨルへ行けるようになっていドッキネーシヨルる。南神に住んでいる役僧と、そこに家族をおいでしている職員たちはすべて、子供たち共どもこの門から出入りしている。庭園の南端から北のバクルタラと五聖樹パンチャパテイの杜ハンスラクルまで、ガンジスの岸沿いに小径が通じている。その小径の両端には花木が植えてある。また、クテイ(館)の南側に東西に延びている道にも両側にも花木が植えてある。ガジタラから牛舎までと、クテイと白鳥池の東方に一区画の土地があるが、そこにも様々な種類の花木や果樹があり、また、もう一つの貯水池いけがある。

大そう朝早く、東の空が赤くなるかならぬうち、明け方の光がこの上なくやさしくさざめき、夜明けの献灯の笛(シヤーン)の音の調べが辺り一面にひびくころ、大実母カーリーの大庭園で花摘みが始まるのだ。ガンジスの岸辺、五聖樹の杜の正面に、ビルヴァの樹(ベルノキ)と甘い香りを辺り一面に撒き散らしているプルメリアの花木がある。茉莉花、マドヴィー、プルメリアの花が聖ラーマクリシュナは大そうお好きだ。聖なるプリンダーヴァンの牧場からマドヴィーの苗を持ってこられて、あの方ご自身でお植えになったのである。白鳥池とクティの東方の、あの一区画の土地のなかにある池の端には、香りのつよい黄色の花が咲くチャンパの木がある。少し離れて情熱的な花ハイビスカス、バラ、斑入蘇芯花が咲いている。

垣根の上にもアパラジター(クリトリア、蝶豆)の花が這っていて——その近くはどこもかしこもジャスミンかインド夜香木(ジャスミンの仲間、悲しみの樹と呼ばれる)の花だ。十二のシヴァ堂の西面にずっと沿って、白い夾竹桃、赤い夾竹桃、バラ、ジャスミン、ベル。

この辺にはマハーデーヴァ(シヴァ)の礼拝の時に供える朝鮮アサガオの花が植えてある。また、高い煉瓦造りの樹台の上に、ところどころにトゥルシーの樹(薬用樹、神聖な木で、どこの家でも植え、朝晩水をかけて拜む)が植えてある。音楽塔の南の方は、ベル、ジャスミン、くちなし、バラ。パンダガートの近くには蓮華夾竹桃と天竺草が植えてある。

大覚者のお住居の横手に、クリシュナの冠と呼ばれている木(大きな枝が下まで届き、炎のような色の花が咲く)が二本ほど、そのそばにベル、ジャスミン、くちなし、バラ、茉莉花、ハイビスカス、白い

夾竹桃、赤い夾竹桃、それから八重咲きハイビスカス、中国原産のハイビスカスなどが植えてある。

大覚者様もむかしは花摘みをなさった。ある日のこと、五聖樹パンチャペティの杜の前にあるビルヴァの樹から葉を取って集めておられた。その時、樹の皮が剥むけてはがれてしまった。そのとき、このような感慨が起こった——「万物の中にいらっしやるあのお方が、どんなに苦しんでいらっしやることか……」もうそれ以上、ビルヴァの葉を集めることは出来なくなってしまうわ。またある日、花摘みのためあちこち歩いておられたところ、とつぜん一条の光明が差して、花かざりの樹、一本一本の花の枝、これらすべてシヴァ神を美しく飾っているのだ。自然そのものが日夜、神を礼拝しているのだ、ということがおわかりになり、その日以来、もう花摘みはおやめになった。

〔タクール、聖ラーマクリシュナの部屋のベランダ〕

大覚者様のお住居の東側はベランダになっている。ベランダの一部は境内の方向、つまり南に向いている。たいていの場合、このベランダで大覚者様は信者たちといっしょにお坐りになって神に關しての話をなさったり、讚神歌をうたわれたりされたものだ。この東ベランダの他の半分は北に向いている。ベランダで信者たちは、かの御方の傍について誕生日を祝ったものだ。ご一緒に坐って讚神歌をうたうのだ。またその御方は、彼等といっしょになってお坐りになり、何回となく供物のお下がり（アラサード）を召し上がる。またこのベランダでケーシャブ・セン氏が自分のお弟子たちを連れてきて、大覚者様と一緒に何度もお話しをされた。楽しく愉快に、ムリ（揚げ米）、ココナッツ、ルチ（油で揚げた

パン)、いろいろな甘いお菓子などを皆でいっしょに坐ってお食べになった。このベランダでナレンドラにお会いになって、聖ラーマクリシュナは三昧サマーディに入られたのである。

〔歓喜の館〕

カーリー寺院は、まさに歓喜の館になっている。ラーダーカーンタ、バヴァタリニー(救世の女神カーリー)、およびマハーデーヴァ(シヴァ大神)への絶え間ない礼拝とお供物の献上、参詣人への接待。一方には、滔々とうとうと流れる聖なるガンジスの眺望。また一方には、芳しい香りをふり撒く美しい極彩色に色どられた様々な花を配した、何とも魅力的な花園。その上また、ひとりの目覚めた人が、夜も昼も神の愛に酔いしれていらつしやる。毎日、毎日が喜びに満ち溢れた女神の祭典だ。音楽塔ナハバトからは楽器のさまざまな音階の音色がいつも聞こえてくる。最初は早朝、まだ明るくならぬうち、朝の礼拝のときに聞こえてくる。その後は午前九時、勤行が始まるときだ。そのあとは正午の頃——お供物とお灯明(アーラテイ)を上げてのち、もろもろの神様や女神様たちは御休息おひるねなさるときである。午後四時に再び演奏が始まる。そうすると神々は御休息おひるねを十分におとりにしたのでお起きになり、お顔をお洗いになる。それから夕方の礼拝のときにも同じように演奏が聞こえてくる。最後は夜の九時ころ、涼しくなった後、神々はおやすみになるので、そのときにも音楽塔ナハバトから再び演奏の音が聞こえてくるのである。こうしたことが毎日、欠かさず行われているのである。